

質疑応答表

分担	質問（実施順）	回答				
		株式会社理究キッズ ①	株式会社明日香 ②	シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社 ③	キャレオス株式会社 ④	株式会社明日葉 ⑤
松原 副委員長	基本理念に基づく事業の実施について	子ども達自身がどのようなことを考えて活動したいと思っているのか、子ども達の意見を尊重し、個々に対応できるような環境を整え、サポートできるよう努めている。	普段の生活では、子ども達の“やりたいことをやる“を意識している。実際にたまなわでは、子ども達は自然が大好きで、校庭に裸足で出て虫を捕ったり、雪が積もった日も校庭に出たりする姿を見守ることを大切にしている。子どもたちが興味を持ってやりたいと思ったことを支援員が否定するのではなく、寄り添い実現させることを通して、普段の生活から子ども発信でできるよう工夫している。	支援員と子ども、子ども同士の日常の日々の関わりを大切にしている。関わり方も、肯定的な言葉を遣い、お子さんの良いところを伸ばすよう意識して関係づくりを行っている。	継続的に目的のあるものにみんなで行き組んでいくことが重要であると思う。子ども達が次はこんなことがやりたいなと日々想像できるような引き出しを作れるよう子ども達と携わっていく。そのためには、子どもたちが利用する際に今日何をするのか明確な目標を持つことが大事である。そういったプログラムを充実させていく。	提案書にも記載したプログラムや地域との連携事業等を中心に、全国で培ったノウハウを活かして質を高めていく。「楽しい」は子どもの心の動きだと思っている。それは、声掛けによるもの大きい。支援員が子どもを褒めることで、子どもの承認欲求を満たし、かまくらっ子が楽しい居場所であるという考えに繋げていきたい。企画書は子どもからこんなことをやりたいという声があったことから始まった。
	モニタリングに関して	児童が意見を集め、目標設定を行う「子ども会議」について、「子ども会議」実施後、職員が「子ども会議」の議事録を作成し、子ども達が見える場所に掲示するなどしてフィードバックを行っている。	いただいた意見は支援員と本部も含めて共有し改善している。個別の案件は、個々に対応している。運営協議会等でいただいた保護者の意見も改善できるところから改善している。また、かまくらっ子に関するアンケートを子ども達に対して定期的実施し、子ども達の想いを吸い取るようにしている。	まだ始まったばかりでフィードバックはできていないが、子ども達のやりたい気持ちを今議事録に残しているところである。秋にイベント実施を考えている。	どんな支援が好きか、苦手か、子ども達にアンケートを取っていく。意見を集約し、子ども達がやりたいことを実現していくことで自己肯定感に繋げていく。フィードバックもアンケートにて実施。1票でも入っているのは意見として認めていく。	“気になる木”はもともと意見箱があったが堅いため、子どもが投函しなかった。子どもが投票しやすいように柔らかくして、葉っぱの形をした意見書に変更し、皆が見えるところで自分の意見を公表するものである。新しく始めるにあたって丸投げでは難しいため、子ども達から意見をきいて、子ども達と一緒にかまくらっ子をどんどん良くしようと思っていることを子どもに伝える。そのためには、まず支援員の子どもへの声掛けからスタートしていく。
品川 委員	特別な配慮を必要とする児童への取り組みについて	入所申請の段階で、配慮が必要となる可能性の高い児童については、入所前に保護者と面談を行う。面談で得た情報をもとに、学校との情報共有など連携しつつ、保護者とも定期的にコミュニケーションを取り、受け	入所の際に保護者が気になる点がある場合、必ず支援員と1対1の面談を設けている。その際に、子どもの特性や留意点を共有し、保護者と同じ想いで支援できるよう心掛けている。学校側とも連携し、学校と同様の	児童と保護者とのコミュニケーション重視。保護者に寄り添い、保護者が何を望まれているか把握し、しっかりコミュニケーションをとって施設ごとに各お子さんに合わせて対応を行っている。	特別支援に関しては、保護者の思いが重要であるため、しっかり寄り添っていく。児童発達支援管理責任者が神奈川県で10名いる。心配がある保護者の次の明確なステップを示すことが必要である。そうすること	基本的には、学校との連携、ヒアリングが重要である。加えて、会社独自の専門的な研修プログラムもある。また、児発管・公認心理士の資格を持つ専門的なスタッフによる定期的な巡回による職員へのアドバイ

		<p>入れを行う。</p>	<p>体制をとることで子どもに不安を与えない支援を行うことを大切にしている。</p> <p>実際に、たまなわでは、支援級の児童が授業の一環で遊びに来る子がおり、先生と支援員の間で関係性を築くことができていると考えている。</p>	<p>医療的ケア児については、実績はないが、医療的ケア児を受け入れる体制は整っている。</p>	<p>で、かまくらっ子に参加してよかったとよりポジティブな意見が増えると思う。配慮を必要とする児童も増加しているので相談できる環境づくりが出来るようICTツールを導入していきたい。</p>	<p>スを活かした運営を行っている。</p> <p>子どもも小さいながら社会性があるので、それぞれ認め合い、活動することの指導も含めて地域の方と連携している。加えて、生活の連続性が大事である。放課後デイサービスを併用している場合、保護者の同意を得たうえで子どもに適した指導やケアができるように情報交換を行い、かまくらっ子でも個別の指導計画を反映させた内容での支援や子どもが育つ環境を作っていく。</p>
<p>危機管理体制について</p>	<p>特に夏は、熱中症対策と感染症対策を両立させる必要がある。子ども達に対する指導で混乱が起きないように、学校での指導を基に、かまくらっ子でも指導を行うことを原則としている。学校とかまくらっ子で対応が異なる地震対策については、月に1回、避難訓練を実施している。</p>	<p>感染症対策については、子ども達が密にならないような席の工夫や、夏場は水分摂取をこまめに行いながら必要以上にマスクを外さないように努めている。スタッフも同様に、食事の際は互い違いになる等の工夫を行っている。職員には発熱した際など感染症に関するフローチャートを渡して、リスクの少ないように対応している。事故防止は場所の見学等行い、児童が安全に学校からかまくらっ子に移動できるようスタッフの配置にも配慮していく。避難訓練は毎月実施している。練習ではなく、実際に起きたことを想定した上で訓練を行うよう職員に意識させている。また、乳幼児親子が利用されるときに地震等が起こることも考えられるので時間や場所で複数のパターンを想定して訓練を実施していく必要があると考える。</p>	<p>防災について、避難訓練を行う中で、避難経路の確認や集合場所の確認を行う。また、会社独自のアプリがあり、そのアプリには全国のヒヤリハット事例が集約されている。そのため、他施設で起きた事例を自分の施設で起きないか確認し、安心・安全を確保していきたい。</p>	<p>天災については、マニュアル化し、支援員が見識を持つことが重要である。そのため、支援員に危機管理体制について徹底していく。また、避難訓練、防災訓練、防犯訓練はそれぞれ目的も違えば、避難場所も違うため、1つにまとめて行うのではなく、それぞれ訓練を行っている。</p>	<p>熱中症、感染症等あるが、子ども達自身が危険から身を守ることをどのように支援できるかということを考えている。感染症対策であれば、手洗いの必要性を子どもたちに伝えて、子どもの危機管理の意識を高めていく形で運営をしていきたい。</p> <p>管理部門については、職員の家族、本人等様々なパターンがあるので、事業継続のため、指針を用いて安定的な運営を実現していく。</p>	

	かまくらっ子について（保護者との連携）	電話、手紙及びメールはもちろん、保護者と直接会う機会を作ろうということで、子どもの家利用者だけでなく子どもひろば利用者にも声掛けして保護者懇談会を実施している。子どもの家が8割、子どもひろばが2割程度の割合で参加いただいているように、少しずつコミュニケーションの活動も広げながら、子どもひろばの活動も保護者にご理解いただける工夫をしようと努めている。	児童の成長には保護者との連携も不可欠だと考える。子どもの家及び子どもひろば関係なく、施設のイベント情報等周知はホームページや Twitter などの SNS を活用している。また、ICT システムを活用し、保護者と日々の連絡を取り合える形をとりたいと考えている。	子どもひろばの児童については、なにかあればコミュニケーションを図っている。保護者と家庭での様子も聞きながら関係性を作っている。子どもひろばの保護者とのコミュニケーションツールとして、アプリの導入を検討している。アプリ内の連絡を通じて、関係性を築いていきたい。	子どもひろばの保護者とは、相談も承る体制を整えたい。現在も使用しているアプリの連絡機能を導入し、思いついたときにアプリで相談ができる、風通しの良い関係づくりを築きたい。また、定期的に紙媒体のお便りによって子どもたちの普段の様子を発信していく。	アフタースクールの保護者との連携については、お迎え等がないため、声掛けする機会が少なく、情報交換が難しい重要課題と捉えている。今回の提案にはないが、ICT の活用をして、お便りやホームページを活用して活動の報告をする等行っていきたい。活動の中で気になることがあれば個別に連絡をする。学校と連携して情報交換をしながら、保護者が見えないところでの活動も保護者と共有し、子ども達が最適に育つような支援をしていきたいと考えている。
石見委員	スタッフの配置に関して	にかいどうの常勤4名については、基本的に原則継続で考えている。 高校生のボランティアについては、部活単位の参加が一番多い。クラブ活動の一環として、各施設に来所し、子どもたちと交流している。個人での場合は、かまくらっ子卒業生が支援員を懐かしんで、来所している。	にかいどうの常勤4名については、継続雇用を検討しているが、予算もあるので、天秤にかけて対応する。意向確認で継続希望であれば継続ということを第一優先で進めていく。	にかいどうの常勤4名については、継続雇用を検討している。	にかいどうの常勤4名については、継続雇用を検討している。加えて当社からの職員を派遣し、エリア全体を管轄したいと考えている。	二階堂の4人(常勤)についても継続雇用を検討している。まずは現状を引き継ぐことが重要である。指定管理期間の5年の中では異動の可能性はある。
	乳幼児の受け入れに関して	いなむらがさきも含め、乳幼児を受け入れることは大前提として考えている。但し、いなむらがさきは学校内の施設であるため、活動に制約があることも事実である。利用者が困ることのないよう、スペースを区切るなどして、できる範囲で対応する。 運営しているしちりがはまの施設は雨天時を中心に、自主保育の団体か連絡を受けて、受け入れをしている。但し、運営が開始して半年弱で	存在そのものを知らない方が多いのが現状。乳幼児利用ができることの周知をし、関係性を構築する。保育士の資格持つスタッフもいるので、専門的な分野でも、保護者に寄り添って悩みを引き出し、保護者にとってホッとできる空間であり、子どもにとっては安全・安心な場所でのびのび過ごすことができる環境づくりを進める。たまなわでは、月1に子育てサロンの団体が利用している。このように、団体とのかかわりも	ベビープログラムはまだ始まったばかりだが、おもちゃ、支援員との関わりや部屋での過ごし方等肯定的な意見をいただいている。秋以降には、体操プログラムの資格を持った支援員によるプログラム等を検討している。自主保育の団体とは、雨天時などによくご利用いただいている。	まだ自主保育の団体との関わりは持ったことないが、今後は連携を密にしていきたい。3歳未満の児童については、現在運営している施設でも受け入れ体制が整っており、マニュアルの標準化等を徹底していく。現在の実施頻度等しっかり引継ぎをしていきたい。	地域の子育て支援拠点として午前開所を行っている自治体は中々ないが、当社が運営する自治体でも、乳幼児の受け入れを行っている自治体がいくつかある。地域のサークルや自主保育の団体に声かけを行い、プログラム等の活動を通して、かまくらっ子の午前開所についてのポジティブな口コミが広がっていくように努めたい。

		コロナ渦となったため、実績数としては多くはない。	密にしていく。			
加藤 委員長	コーディネーターとのコミュニケーションについて	<p>現場のスタッフは子ども達と直接関わっているため、子どもたちの声が一番耳を傾けている。現場のスタッフは、子ども達の声を理解し、保護者に繋ぐ役割を担っている。保護者と子ども達が認識を合わせ、子ども達がぜひ行きたいと思ってもらえるような環境作りを心掛けている。</p> <p>集団の中で自分から意見を言える子と言えない子がいるのは事実である。その中でだれが意見を出していないかをきちんと把握し、一人ひとりに寄り添いながら、実際に思っていることを引き出せるよう支援員と児童の信頼関係を築いていく。そのためにも、スタッフの配置は安定した体制で運営できるように配慮していく。</p> <p>家庭環境については、普段保護者と話す中で気になる点については、保護者と面談をするよう努めている。実際に、しちりがはまでは、心理相談員と保護者の面談を実施するなどサポート体制を整え、家庭環境への理解を深められるように取り組んでいる。</p>	<p>目立つ行動をする児童については、何か背景があるということを支援員は常に心に留めている。そのため、一方的に行為を否定するのではなく、どうして問題行動を起こしてしまうのか背景を捉えて、無理強いせず子どもが安心して過ごせるよう働きかけていく。職員への研修も数回実施。</p> <p>市からも障がいに関する研修案内ある。社内にも臨床心理士の採用も進めていくので、より良い支援ができるよう勧めていく。</p> <p>放課後かまくらっ子の基本理念に念頭におき、自分が育った街にどんな人が住んでいるのか、またどんな地域性があるのか学び、地域住民のお力添えをいただき、異年齢の方との関わりを深めていきたい。</p>	<p>アンケート結果より、徐々に子どもの自主的な参加が増えてきているが、保護者の中には保育の場であるというイメージがまだ根強い。そのため、保護者の方及び子どもたちとの信頼関係を築いていきたい。また、子どもたちにとって面白いと感じるものを提供していきたい。コロナ渦でもできることとして、全国で運営している当社だから出来る全国と繋いで子どもたちの交流などを図っている。課題となっている高学年のプログラムについては、先日タグラグビーが好評だった。今後子どもたちの意見を聞きながら、楽しいプログラムを行い、支援員と子どもたちが何でも相談しあえる関係を築き、安心して利用いただける施設にしたい。</p> <p>支援員がこどもの背景をしっかり理解するために支援員の教育には力を入れている。保護者も悩みを抱えているので、保護者向けセミナーを実施し、支援員と話すことで家庭環境が好転したという事例もある。地域に寄り添って今後も運営していきたい。</p>	<p>子ども達と人として付き合うことを大切にしている。支援員が子どもの懐に入れるのかが重要である。それができるよう指導を行い、研修を実施していく。安心・安全が守られていると子ども達が感じるのは楽しいという時だと思う。楽しいを作るために子ども達の懐に入れるかどうか、例えば共通言語を知っているかどうか、ということが重要である。そういった支援を行ってもらうために研修等が重要になってくる。</p> <p>鎌倉は歴史も深い文化もある所である。まず鎌倉を知ることが大切である。住んでいる人からするとただの風景になっているところも他からみると新鮮なものである。鎌倉の歴史や文化を子どもにも知ってもらい、永住したいと思えるようなきっかけづくりができればと思う。</p>	<p>まず第一歩として、放課後かまくらっ子に来ていただくために、他自治体では、学校に職員が伺い、事業を紹介している。そういった取り組みから少しずつ広がっていくよう努めている。</p> <p>また、児童の生活の連続性を意識し、家庭的に配慮が必要な児童について、早期発見を目指し、関係部署との丁寧な連携・協力をしていきたい。</p> <p>今までの実績から、地域のパトロールの方など地域の方と情報交換をすることはとても重要だと考えている。高校生のボランティアサークルと一緒に活動を行い、異学年交流等で地域の方と顔見知りになり、地域に愛着が持てるようにする。</p> <p>実際に、当社には鎌倉市出身の職員がおり、地域に貢献したいという申し出があったため、今回の応募に至った。</p>
	ICT活用における放課後かまくらっ子の運営について	<p>現在運営している各施設ではオンラインのプログラムに常時対応できるよう、プロジェクター、スクリーン及びスピーカ</p>	<p>今までもオンラインを使った活動の実績はあり、オンラインのゲーム大会や地域の方から学んだことを実施するなど積</p>	<p>オンラインに寄りすぎると本来の幼児期の発達に支障が出る可能性がある。かまくらっ子では、昔あそび等のプログラム</p>	<p>ICTの問題点として、時間帯がキーとなる。ICT に気を取られ、家に帰っても仕事をするのはなく、しっかり線引きをし</p>	<p>オンラインの工場見学や、海外と繋ぐプログラムを導入している。</p> <p>オンラインの良いところは双</p>

		<p>一といった基本的な機材の設置は必ず配慮している。あわせて、オンライン会議も対応できるように、定期的にオンライン会議の機会を設けている。また、長期休暇期間には当社の本部として独自企画でオンラインプログラムを実施しており、子ども達にも長期休暇になると、あのオンラインプログラムがあるとたのしみにしてもらえようような環境作りを行っている。</p>	<p>極的に取り組んでいく。</p>	<p>を実施していたが、コロナ渦で制限がかかったときにオンラインを活用した。コロナ渦以前は交流のなかった全国の子どもとつながることで、今までと違う子ども達の興味関心を引き出せれば良いと感じている。</p> <p>石栗先生は全国対応だが、鎌倉の子ども達は毎週木曜日にチャンネルを繋いでコミュニケーション図っている。</p>	<p>て仕事ばかりにならないようにしていきたい。</p> <p>サイレントタイムは、学術的なものではないが、運動の前後にクールダウンすることで、集中力の低下、ケガのリスク回避のため、導入している。</p>	<p>方向で意見を交わせる場所である。但し、課題として実際に触ることができないため、プログラム開催前に本物を送ってもらう等対応をしている。地域の方との連携による本物体験とオンライン体験を併用してうまくプログラムを取り入れていきたい。</p> <p>また、職業体験プログラムについては最近始めた取り組みである。現在は消防署等公の職業のみだが、今後は民間企業の職業体験も行っていきたい。</p>
大西委員	財務に関する質問全般	<p>決算報告で、一部赤字になっているが、計算ミスによるもの。経営については全く問題ない。</p>	<p>運営上、子ども達による水の出っぱなし等は注意促し等を支援員が行い、他にも節電など小さなことから経費削減に努めている。</p>	<p>収支予算書では人員の配置が重要であると考えている。新1年生の入所者数等によってうまく人員調整を行っていきたい。支援員だけでなく、コーディネーターの配置についても必要時間等算出しており、人員に重きを置いている。</p>	<p>人件費部分で現在の処遇を下回らないように努めることを大前提と考えている。また、職員にはコスト意識をしっかりと持ってもらい、備品等使い切るのではなく、近隣の事業所と共有するなど経費削減につなげたい。</p>	<p>人件費について重要視している。継続してもらうモチベーションとして昇給が大きく寄与すると思う。そのため、毎年昇給費用を計上しているところが当社の特徴である。経費削減について、ただ削減すればいいというわけではないことを大前提に考えている。子ども達のためになるものに投資を行う。そのため、物品購入時に仕入れ価格を下げる取り組みをすることで経費削減を行っている。</p>